

Title	都市プランの歴史地理(Abstract_要旨)
Author(s)	矢守, 一彦
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1971-05-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/213633
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

【 2 】

氏 名	矢 守 一 彦 や もり かず ひこ
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 64 号
学位授与の日付	昭 和 46 年 5 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	都市プランの歴史地理

(主 査)
論文調査委員 教授 織田武雄 教授 有光教一 教授 池田義祐 教授 前川貞次郎

論 文 内 容 の 要 旨

「都市プランの歴史地理」と題する本論文は、歴史時代、とくに封建時代に形成された都市の発達過程を、都市プランの分析を通じて、歴史地理学的に究明することを企図したものであり、第1篇6章および第2篇5章より成る。

まず第1篇第1章では、O. Schlüter 以来のドイツ地理学派を中心とする都市形態論の研究成果を論述し、現在の都市の類型設定については、既往の地理学の都市形態論は一応高い水準に達したものと評価している。しかし歴史地理学の立場からみれば、これらの都市形態論は、都市の現状形態の静態的な考察に基づくものであるため、非歴史的な形態分類に偏している点がみられることを指摘している。従って都市プランの歴史地理学的な研究方法として、著者は都市をすぐれて複合的・有機的な存在とみなし、都市プランを(1)都市核、(2)都市広場、(3)街路網、(4)都市囲郭に分解し、これらの都市の空間構成要素相互間の *genetisch* な関係、すなわちいわば系統発生的なパターンを比較検討することによって、歴史時代の都市の発達過程を把握し得ると主張する。

この方法に基づいて、第2章では都市発生の母胎をなす都市核の成立、その融合や競合などの諸関係を、主としてヨーロッパの中世都市を事例に考察している。ついで第3章では都市核に付随する都市広場の立地と機能、第4章では都市内部の基本形態をなす街路網について、その地域的類型と変容系列を明かにし、とくに都市の街路網としても最も普遍的な方格状街路網の起源と発達、および新大陸の植民都市への伝播について論究し、これに対して、街路網としては非幾何学的な錯雑した形態をなすヨーロッパの中世都市においても、機能的には街区は整然と区別されることを、ドイツの都市について例証している。

第5章では、歴史時代の都市の最も顕著な特色を示す都市囲郭について論述している。それを要約すれば、著者は都市囲郭の源流を西アジアの新石器時代における農耕村落の囲郭に発生を求め、さらに統一的支配勢力としての国家組織の成立にともない、支配者の居館と一般住民の居住区域の合体、およびそれを取り囲む都市囲郭の発達過程などを歴史的に追求している。また西アジアからの都市囲郭の伝播の変容過

程として、世界の都市囲郭を(1)地中海系、(2)地中海系より派出したヨーロッパ系、(3)イスラム系、(4)インド系、(5)中国系の5系統に大きく地域類型化し、それぞれの系統に属する都市囲郭の形態や機能について、系統発生的な比較考察を行っている。また第6章では、前章に述べた中国系統の都市囲郭の日本への伝播経路にあたる朝鮮に、とくに焦点をあて、朝鮮における都城と一般の邑城、および満鮮式山城について、その分布・形態・成立の時期などの問題を詳論している。

以上にみられるように、第1篇は世界の歴史時代の都市を対象としているのに対し、第2篇は日本の近世城下町を対象とした研究である。従って考察の方法も第1篇に倣い、第2篇第1章では、城下町プランから城内・侍屋敷地区・下士組屋敷地区・町屋地区、および城下域を区画する囲郭を、城下町の主要な構成要素として析出し、さらにそれに基づいて近世城下町の諸類型を次のように設定している。

(1) 中世末ないし戦国期の城下町構造が近世にまで持続されたものであり、城と城下とは分離し、未結合のままのタイプ。

(2) 戦国期から江戸時代初期に建設された城下町に多く、侍屋敷と町屋とが近接もしくは混在し、それを囲郭がとりかこむ、いわゆる「惣構え」とよばれるタイプ。

(3) 幕藩体制の成立期に建設ないし改修された城下町に主にみられ、外郭によって内町と外町とが区別されるタイプ。

(4) 前者とほぼ同じ時期の城下町にみられ、郭内には侍屋敷地区しか存在しないタイプ。

(5) 江戸時代中期以降に成立した城下町に多く、侍屋敷地区の囲郭さえ存在しないタイプ。

また著者はこれらの城下町の諸類型とその変容系列が、藩の規模や藩政の推移とも関連することを論じている。ついで第2章では、城下町プランと地形との関係を考察し、第3章では、町割・屋敷割・街路など、城下町のさらに細部にわたる構成要素をとり上げ、各期の城下町プランの比較によって、町割では基盤型から短冊型へ、屋敷割では江戸型から京型への推移過程がみられることなどを指摘している。

また第4・5章は、明治維新の城下町の解体による変化を取扱い、第4章では明治以降旧城下町における人口構造や土地利用の変遷を観察し、第5章では、城下町時代に発達した各種の伝統工業の、明治以後における盛衰や、立地移動を論じている。

なお別に参考論文として付された「幕藩社会の地域構造」は、これまで発表された論文を集めたものであり、著者は地方知行・商品流通機構などを通じて、城下町を中心とする藩領の地域秩序を究明している。

論文審査の結果の要旨

集落地理学において、都市の平面形態による都市分類の研究は、これまで数多くみられるが、これらの都市形態論はすべて都市の現状形態による分類を目的としたものであり、都市の歴史地理学的研究には、適用し難い面もみられる。従って著者は都市を有機体とみなし、最近の地理学にみられる生態学的方法をとり入れ、都市核・街路網形態・囲郭などの都市プランを構成する諸要素のパターンを、genetischに分析することによって、都市の発達過程を把握し得ると主張する。著者が提唱するこの独自の方法は、もちろんhistorischな方法ではないが、世界の諸都市の発達史を厳密な意味で歴史的に比較し得るまでには至っていない以上、都市の歴史地理的研究方法としては、蓋し適切なものと首肯される。

著者はこの方法に従って、本論文の第1篇では、ヨーロッパの中世都市・イスラム都市・中国都市など、歴史時代に成立した囲郭を有する都市を比較検討し、また第2篇では、各城下町の設立年代と城下町プランの分析を通じて、わが国の近世城下町の発達過程を明かにし、幾多の注目すべき見解を示している。

ただ問題が広範なため、世界の都市を論じた第1篇では、論旨のよく尽されていないところもみられるが、歴史時代に成立した都市の発展過程を、アジアやイスラム圏を含めて論じた研究は他に類がなく、この点においても著者の業績は独創的なものとして、高く評価さるべきである。

また参考論文「幕藩社会の地域構造」は、藩領地域に対する城下町の機能を論じたものであり、本論文第2篇の城下町の研究を補うものである。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。